

なめがた大使 小林光恵さん 書きおろしエッセイ 五感でキャッチ！なめがた漫遊記 第21回

行方アートトリエンナーレ、 などどうでしょう

チューリップの球根を商品にする場合には、花の盛りに花びらが摘み取られる。その大量の花びらが川に流れている光景を目にした前衛いけばな作家の中川幸夫（※1）氏は「摘み取られるチューリップの花びらをいつか空から降らせたい」と思うようになったという。

その願いが、2002（平成14）年の5月に越後妻有（※2）でかなった。「天空散華・妻有に乱舞するチューリップー花狂ー」と題したイベントで。

小雨降る中、信濃川の河川敷に4000人の観衆がドーナツ状に集まり、中心の空きスペースに体を向けている。最前列の人は座り、後ろの人たちは立つような形で。円の中心には、舞踏のレジェンド・大野一雄氏（当時95歳）が、顔を白く塗り、たつぷりとしたドレスを着けて、白いひじ掛け椅子に座っている。

その上空に、爆音とともにヘリコプターが現れ、色とりどりのチューリップの花びらが降り始まる。全部で10万枚の花びらが、大地と人間たちの上に降りしきる。

そんな中、大野氏が座ったまま、空に手を伸ばして体全体でパフォーマンスを始めた。それは幻想的なだけでなく鬼気迫るものがあり、その場の観衆は固唾をのんで見守ったそうだが、テレビ画面越

しに目にした私も、いつしか息を止め両拳を握っていた。

何といっても感動したのは、花びらが降る中、踊る大野氏に中川氏（当時84歳）が静かに歩み寄り、二人が手を取り合ったシーンだった。

先日、行方の友達が自宅の庭に咲いた水仙を分けてくれた。小ぶりの花びらの白と黄色のコントラストがかわいらしい日本水仙だ。この花の濃厚な香りを胸の奥まで吸い込むと、前述のイベントの様子が脳裏にぱっとよみがえった。

中川氏が存命で、彼に行方市での生け花を依頼したなら、どんな作品を？と考えるだけで胸が高鳴り始まる。

※1 なかがわゆきお。前衛いけばな作家を貫き、流派に属さず、生涯を通じていけばなの既成概念を覆すような表現を切り開き続けた。
※2 えちごつまり。新潟県十日町市と津南町にまたがる地域の総称。

小林 光恵さん



行方は芸術祭が似合う地だと以前から考えているのですが、いかがでしょう。

行方市出身。つくば市二の宮在住。市報行方の本年1月号から、表紙の誌名の表記が「行方市フォント」になりましたね。優しく落ち着いていながら明るさもある素敵な書体です。

市公式ホームページ内で「行方帰省メシ」連載中。
サイトはこちらから▶



地域おこし 協力隊

連載コラム ②1

11月29日（土）、天王崎公園で「第2回行方朝市」を開催しました。当日は天候にも恵まれ、雄大な霞ヶ浦の景色を背景に、多くの方に会場いただきました。会場では、行方地域で生産された地場野菜を百円均一で販売するコーナーをはじめ、市内の店舗に出店いただき、一日限りの「行方市仮想商店街」として展開し、買い物を楽しみながら市内の魅力に触れていただきました。さらに、福祉活動の紹介ブースや、子どもたちに人気の金魚すくい、伝統工法「木組み」の体験ブースなど、多世代が楽しめる企画を実施しました。

音楽ステージでは、市内在住のAIRRさん、紫音さんによる歌唱パフォーマンスが会場を彩り、茨城大学の学生の皆さんにも、農業クイズ大会やモルック体験、かぼちゃ販売などを通して、朝市を盛り上げていただきました。

行方市は霞ヶ浦と北浦に囲まれ、肥沃な大地を生かして80品目以上の農産物が生産される自然豊かな地域です。地域の皆さんと共に市の魅力を発信する場として、今後も行方朝市の継続開催を目指していきます。



▲ 朝市の全体の雰囲気



▲ 茨城大学の学生がかぼちゃ販売



▲ 県内各地域の協力隊のブース



▲佐藤 晶 隊員

【令和5年11月1日～現職】新規就農を目指し農業に従事するほか、市の農業を盛り上げるためのPR活動等を行う。マルシェ等の企画提案も実施。



▲活動はインスタグラムに掲載しています。



▲ 行方市農業クイズ大会を実施



▲ 茨城大学のモルック部の体験コーナー



▲ 行方野菜 100円均一を実施